

ずいそう

## ベトナムの日本語学校に勤めての生活

金子典由



2008年12月31日に佐藤工業を早期退職しました。定年退職後に、日本語教師をしたいと3年前から準備をしていましたが、会社の早期退職制度に応募して、計画より2年ほど早くその時がやってきました。まだ、準備不足だったのですが、とにかく、ホーチミンにある日本語学校の、高田馬場での説明会に出席しました。その返事は、「教師の口は一杯です。事務員なら空いています…」でした。ホーチミンに行けば教えるチャンスもあると思って決定しました。家族も、「人生の最後に、自分の夢を叶えられる人はそんなにいないし、折角のチャンスだから」と承諾してくれました。今、2009年9月、ホーチミン市3区にある日本語学校で事務員をしています。そして、ちょっと教えています。

2009年3月5日の深夜にベトナム ホーチミン タンソニェット空港に到着しました。日本の3月の冬からいきなりの常夏のホーチミン。暑い。汗が出る。のどが渇く。水は飛行機の中でもらった小さなペットボトル1本きりです。空港から学校の寮に直行で案内され、「あした、10時に迎えに来ます。」ベトナム人の事務員が帰っていきました。「空港で両替した300万ドンはあるが、朝飯どうしよう。」何処に何があるのかわからないし、第一レストランに行っても注文できないし、途方にくれました。次の日の朝を迎えました。昨日もらったカップラーメンに、大事なペットボトルの水で湯をわかつて腹ごしらえをしました。

10時、寮の前に迎えのバイクが現れました。「行きましょう」「えっ はい」。『そうか寮から学校までの道順を覚えるためにバイクで行くのか』と一人で納得してバイクの後ろに乗りました。ディエン ビエンフー通りに出た瞬間、そこは、バイクの河です。バイクの轟音と、クラクションの音と音、頭がぐらくらします。バイクから落ちそうになるのを手に力を込めて後部座席につかまります。信号で止まる度に、それぞれのバイクがスタートダッシュの好位置を確保しようと轟めき合う。信号が青になる前から、フライングスタートするせっかちさ。みんなが我先に、先を争って先頭を争っています。これがベトナム名物の交通事情かと実感しました。



写真一 1 バイクの洪水

日本語学校は、ナム キー コイ ギア通りとの交差点にあります。

「おはようございます。」日本人とベトナム人の教師達が授業に向かいます。その日以降の日程が示されました。学校は朝7時20分から始まり11時までが朝の2時限の授業、11時30分から14時までが休み時間、17時20分から21時までが夜の2時限です。

みんなは、11時30分になると食事や昼寝のために自宅に帰ります。そして15時か16時に再び出勤してきます。フレックスタイムで先生方は授業スケジュールに合わせて勤務時間が変化します。日本語学校なので校内は日本語が公用語です。日本人には都合が良いのですが、ベトナム人にとっては大変な職場だろうと察します。ベトナム人教師の勉強のための方針なのだそうです。私にとって、ベトナムに居るのに、仕事は日本語、ベトナム語は職場の外だけという生活環境です。

学校の敷地内にCanteenと呼ばれる、簡単な屋根がある屋外食堂が付属しています。朝にはコーヒーと朝食、昼には昼食を提供してくれる。さっそく、コーヒーを買いに行きました。「カフェいくら How much? バオ ニュー ティエン」「カフェ スイーダ」「イエス」何が出てくるか興味津々でした。ベトナムはコーヒーの輸出世界第二位の国で、みんなコーヒーにはうるさいそうです。ろ紙とか布が入ってない、アルミの容器の底に微妙に穴が開けられた容器にコーヒーの粉を入れ、お湯を注ぎ、底の穴から抽出された濃いコーヒーが、ゆっくりと滴り落ちます。これを、バイクに乗ってせっかちに競争していたと同じ人とは思えないほどの優雅さで、この時だけはタップリと時

間を使って待っています。ベトナムは、美味しいもののためには、時間を惜しまない美食家の国なのかもしれません。ゆっくり滴り落ちたコーヒーにたっぷりの練乳を混ぜます。そして、氷に入ったグラスに注ぎ込むドロツとしたミルクコーヒーの出来上がりです。一口飲むと、甘い、甘い。でも美味しい。この暑さでたっぷり汗をかいた体に滲みていく幸福な琥珀のエキス。気がつくともう飲み干してしまいました。日本じゃ、コーヒーはアメリカン、タツプリのほろ苦いコーヒーと決まっていたのに、コーヒーの定義が変わった瞬間でした。

昼はこの屋外の食堂が定番です。お皿に盛られた白いご飯の上に、本日のおかずと野菜を載せた主食とスープと氷の入ったお茶（チャダ）で1人前。時々、もう1品おかずを追加します。好みに応じてヌックナムか醤油をかけ、味を個人の好みに整えます。唐辛子をかじりながら食べる人もいます。定食は15,000ドンです。日本円にして85円程度です。市街の中心に行けば1食40,000ドン位と比べると、気軽な定食屋といった感じでしょうか。

昼の食事が終わったら近くのスーパーに寄って、明日の朝食の買物です。スーパーでのお目当ては、なんといってもドリアンなどの果物です。生鮮野菜・果物売場に近づくと、異臭がしてきます。最近には気にならなくなりましたが、はじめはかなり気になりました。どうして、きれいなスーパーなのに、こんな臭いがするのかと。その元がドリアンでした。こんな臭いものを、スーパーで売っていいのかと思ったものでした。でも、今は、つい、買ってしまいます。寮に戻って食べると、しばらくの間、食堂がドリアン臭になります。ドリアンの嫌いな人もいますから、その臭いには気を遣わなければなりません。でも、ドリアンは美味しい。特に熟したドリアンに巡り合った時は幸せが120%になります。でも、ドリアンが果物の王様なのは味だけでなく、値段も王様です。マンゴスチンも値段は女王様です。バナナは兵隊です。しかし、バナナは、子供の頃、遠足と病気の時に食べた高級な果物の思い出があり、私にとっては心強い生活の味方です。それ以外に、ドラゴンフルーツ、竜眼、マンゴ、ジャックフルーツ、スイカ、パイナップル、りんご、柿、ブドウ、スターフルーツ、数え上げたらきりが無い果物のオンパレードです。

そして、デザートには、お米のお菓子。外郎のような食感ですが豆が練りこんであります。もちろんスナック菓子やチョコレートなどは日本と同じでそろっています。

寮でちょっと昼寝をして、14時に再び学校に戻ります。15時頃に小腹が空くと、近くのケーキ屋も兼



写真—2 お米からきたおやつ



写真—3 路上のおやつのお店

ねているパン屋でサンドイッチを購入します。フランスの植民地だった時期があったせいでフランスパンも美味しく、このフランスパンにソーセージと野菜を挟んだサンドイッチです。外がカリカリで中がフワフワ、これとカフェ スィーダでお腹を満足させます。

夜は5時30分が終業時間です。夜の食事はフーティエに決めています。ベトナムは米の文化。米を粉にして、きしめんのようにしたフォー、そうめんのように細くしたフーティエがあります。これをうどんやラーメンのように食べます。ちょっと変わった料理は、ビーフシチューの中にフーティエが入ったフーティエボーコー。これは、はじめ、「えっ」と思いましたが食べると美味しい。「お米を、麺にして食べる。」このアイデアは日本でもどうでしょうか。古古米と敬遠しないで、お米を麺にしたり、ライスペーパーにしたりして食べれば、日本の食文化の幅が一層広がるのではないかと思います。

ホーチミンに来てから、今、6カ月になりました。1日の生活を食べ物から見てご紹介しました。これまでとは、全く違った環境の中で、第二の人生を送っています。この決断を支えてくれた家族に感謝しています。そして、第二の人生を少しでも有意義になるように支援していただいた元の会社の皆様にも感謝しております。

日本語学校に勤務してのお話は、また別の機会に、お話ししたいと思います。